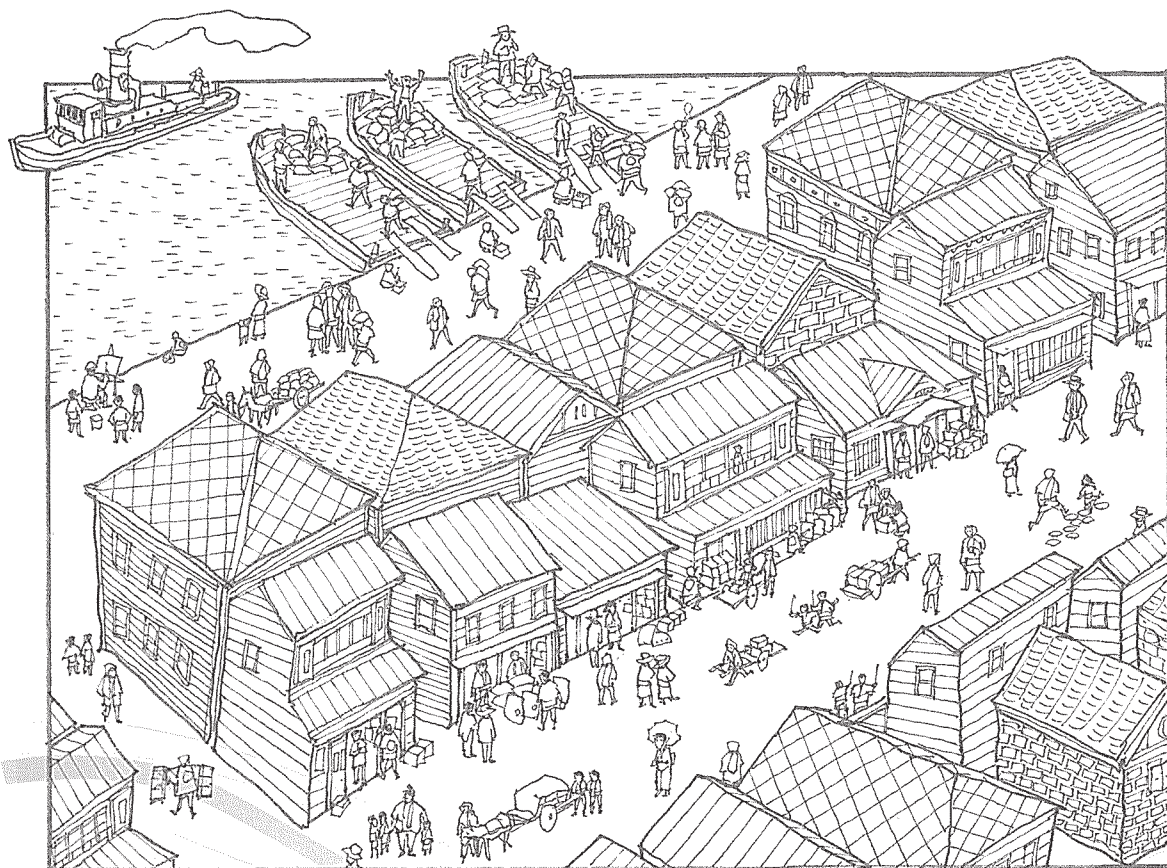


運河ジオラマ(運河雑感)

北村猪之助



浅草橋から中央橋にかけて運河通り、郵便局本局から駅前中央通り、色内十字街にかけての色内大通り、そして、その間にある出抜小路の様子、ここ30年程で一変してしまつた。終戦直後にあつた会社は、一社もなく、昔から住んでいた家は木又孝さん僅か一軒と、当時とは想像がつかない姿となつた。昭和15年頃の色内大通りには、北海道拓殖銀行、三菱銀行、郵便局本局、三井銀行、越中屋ホテル、函館製網船具、紙文具卸の△池田、食品原料の小滝弥五郎商店、藤武良呉服店、木又漁網店、商工会議所、莫大小の木村屋、鋼材の稲葉商店、△梅屋、長尾印判店、キト旅館、工藤時計店、貯金局、川田憲太郎商店、その他、沢山の会社があり、運河通りには、大阪商船、三井船舶、北日本汽船、荒田商会、小林・塩田・久野の回漕店、樺太の原木積み出しの因能戸組があり、出抜小路には、私の生家企北村船具店、原田脩部、浜名脩部、木下海事写真館、小樽で一番煙草が売れたという寺西百貨店、富島組、画家の兼平英示さん、そば屋、いさば屋(鮮魚店)、小料理屋、その間に浜で働く人々の家があり、ついでにライオン頭の共同水栓もあつた。運河は今より幅が広く、中央橋の橋桁も今よりずっと

高く、20トン位までの棧帆船、例えば浜益・厚田通いの船、積丹・利尻通いの船等は、橋桁をくぐつて赤レンガ倉庫前まで入ることが出来た。

運河の朝は早い。脩を曳く船は、早朝から焼玉エンジンを始動させる。船は小さいがエンジン音は大きく、その振動は岸辺の家々に響くほどであつた。脩も荷役の準備に忙しい。赤レンガ倉庫側に着く脩は横付け、道路側に着く船は、船尾を着けて縦に付くとモ付けとなつた。荷役が始まると、荷を担いだ仲仕が、幅二尺ほどの歩み板を元氣よく往き来する。荷は、吠・俵でドングロスか箱ものもある。張り方の威勢の良い声が響く。

「ヤレコラサーのドッコイシヨ、もひとつおまけだドッコイシヨ」担ぐ人も担がせる人も呼吸を合わせてノンコにかけて上手に肩に張る。仲仕の中には女の人もいる。男の中に入つて働くのだから力も強いが氣も強い。浜には、男女同権等という制度じみた言葉はない。実力第一、女性でも働きの良い人は大事にされる。女性達の中に男に引けをとらない通称「ナンバのかあさん」という力持ちがいた。青チヨロイ若造は、「ナンバのかあさん」に、「ぎーっ」と

睨まれたら縮み上がってしまう。

「ナンバのかあさん」には、ヒロシという息子がいたが、かあさんが怖いからヒロシをいじめる者など誰もいないのである。夜荷役もあつたから出抜小路は、いつも賑やかであつた。忙しくなれば子供達も身欠き鯨をかじりながら「ボンボン押し」や「マン棒取り」の手伝いをした。荷役の切り替え時に船の船頭たちは、船首の部屋で一服休みをする。子供達も付いて行く。そこでは、だいたい前夜飲んだ酒の話や女性の話である。「前夜飲んだ酒は安酒で頭の中で跳ねてかなわない」とか、「浜一番の美人は、何と言つたつてカフエーサンバシのマダムだべ」とかである。だから、子供達も浜一番の美人は「カフエーサンバシのマダム」と知るのである。でも、時には、「この運河は広井先生の指図で出来たのよ。だから、たいしたものよ」という話も出る。子供達は、折に触れて先人の偉業の話聞いて、「広井先生は偉い人」だと知るのである。

暖かくなると絵描きの兼平英示さんは、運河に出て絵を描く。兼平さんは足が悪かったから、子供達は水や絵描きの道具を持って付いて行く。イーゼルを立てる場所もだいたい決

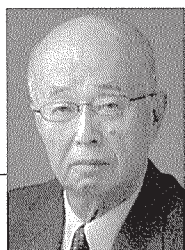
まっていた。子供達はいつも後ろで見ていた。それに飽きるとガキ大将が「サンバシのマダムを見に行くべー」と叫ぶ。一同が「行くべ、行くべ」と言いながら打ち揃つて見に行く。「カフエーサンバシ」は昼間だから皆で掃除をしている。数人の女性はいるが化粧前だから、子供達には美人が見当たらない。と、なればマダムはいないことになるので、「帰るべー」となる。

木下海事写真館には、船長や機関長が着るような服があつた。若い船員達は、その服を着て写真を撮ると、束の間の船長、機関長になるのである。そして、その写真を故郷の親に送り「俺は頑張っているから心配するな」と、なるのである。戦時中の憲兵の厳しい監視の時でも木下さんは、港内の撮影は自由に出来たそうだ。

小樽には美味しい餅が多いという。浜にも餅屋さんが出ていた。忙しく弁当を食べる時間がない時、腹持ちが良くて、どこでも持つて行ける餅は恰好の弁当で、餅を食べる人も多かったのだろう。小樽の餅が美味しいことの一因は、忙しく働く人達の食文化であつたかもしれない。

色内運河界限は、かつてとは全く様変わりの景色となつた。

銀行、船会社、大商社等、全てが撤退するとは大方の人は予測し得ないことであつた。世の中の流れと商いの変わり様の激しさは、今更ながら言うべくもないが、当時、売れない絵を描いていた兼平英示さんの絵は、兄の三浦鮮治さんの絵と併に小樽洋画の源流として高く評価され、また、かつての拓殖銀行、三井銀行、荒田商會がニトリ芸術村として生まれ変わり多くの人々が訪れる様子を見るにつけ、「商売とは何だろう。文化の力とは何だろう」と思わずにはいられない。私も後ろ髪を引かれる思いで八十数年住み慣れた出抜小路から去ることになつたが、今も折に触れ運河へ行く。運河プラザでコーヒーを飲み、そつと目を閉じて昔を思う。私の頭の中には出抜小路の幼馴染のナンバのヒロシ、ササヤスのジロー、木又の坊やさんが現れ、私も傘のイノチャンに戻れるのである。



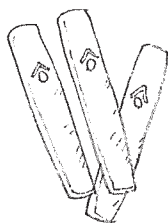
北村 猪之助氏

小樽船用品(株)
代表取締役会長

昭和10年1月24日生まれ。

小樽市南浜町にあった北村船具店の長男として誕生(現在のホテルソニア出抜小路側)。

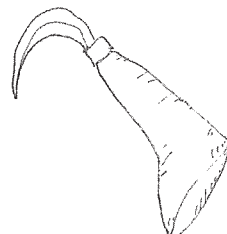
昭和16年稲穂国民学校では、故石原裕次郎と机を並べる。親子二代で色内港町町内会長を務めている。元小樽商工会議所議員。



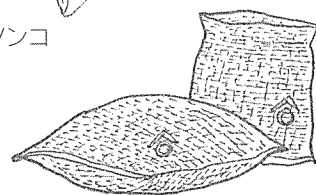
マン棒



ポンポン



ハンコ



ドングロス